

なさ」(「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準)との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『防衛機能』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-15-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、盗み、薬物・ドラッグ、性行為の強要であった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が、「いけない」と思っている者よりも自我機能『防衛機能』尺度得点が高かった。従って、これらの問題行動をいいと思っている者の方が、いけないことと思っている者よりも、自分の欲求に対して柔軟な態度を持つと同時に外界にも適応的な行動を取りうる、といった自我機能の発達が未熟であることが示された。

表4-15-2 問題行動に対する意識と自我機能『防衛機能』

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでもない	いけない	いい	どちらでもない	いけない	
盗み	2.95(1.01)	3.04(0.55)	2.89(0.75)	3.27(1.40)	3.75(0.97)	2.99(0.72)	F(2, 585) = 3.67*(いけなさ)
薬物	3.14(0.97)	3.42(0.42)	2.89(0.73)	3.33(1.04)	3.13(0.79)	3.00(0.74)	F(2, 585) = 3.55*(いけなさ)
性強要	3.16(1.02)	3.20(0.57)	2.91(0.74)	3.30(0.55)	3.33(0.77)	2.98(0.74)	F(2, 580) = 5.09**(いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と自我機能『防衛機能』

高校生の自我機能『防衛機能』と性別(「男子」「女子」の2水準)、問題行動を「とめるか」(「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準)との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『防衛機能』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行ったが、問題行動を「とめるか」の主効果には有意差はみられなかった。

第16項 問題行動と自我機能『刺激障壁』との関連

①問題行動の実体験の有無と自我機能『刺激障壁』

高校生の自我機能『刺激障壁』と性別(「男子」「女子」の2水準)、問題行動の実体験(「ある」「ない」の2水準)との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『刺激障壁』尺度得点を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-16-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、恐喝、薬物・ドラッグ、性行為の強要であった。恐喝、薬物・ドラッグ、性行為の強要の経験がある者の方が、ない者よりも自我機能『刺激障壁』尺度得点が高かった。

従って、恐喝、薬物・ドラッグ、性行為の強要の経験がある者の方が、ない者よりも、外界からの刺激に対する感度および反応態度をほぼ適切なかたちで持ちうるかどうか、といった機能における発達が未熟であることが示された。

表4-16-1 問題行動の実体験の有無と自我機能『刺激障壁』

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
恐喝	2.39(0.69)	3.10(0.75)	2.54(0.76)	4.19(0.62)	F(1,587)=18.14**(体験)
薬物	2.40(0.70)	3.13(0.73)	2.54(0.75)	3.88(1.63)	F(1,587)=18.124**(体験)
性強要	2.41(0.70)	2.88(0.77)	2.54(0.76)	3.63(1.32)	F(1,582)=10.84**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自我機能『刺激障壁』

高校生の自我機能『刺激障壁』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『刺激障壁』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-16-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、無免許運転、自転車窃盗、盗み、恐喝、暴行、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要の9種類の問題行動であった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が、「いけない」と思っている者よりも自我機能『刺激障壁』尺度得点が高かった。従って、これらの問題行動をいいと思っている者の方が、いけないことと思っている者よりも、外界からの刺激に対する感度および反応態度をほぼ適切なかたちで持ちうるかどうか、といった機能における発達が未熟であることが示された。

表4-16-2 問題行動に対する意識と自我機能『刺激障壁』

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでもない	いけない	いい	どちらでもない	いけない	
無免許	2.61(0.89)	2.64(0.63)	2.37(0.67)	2.83(0.95)	2.70(0.76)	2.52(0.76)	F(2,584)=4.96**(いけなさ)
自転車窃盗	2.83(1.00)	2.66(0.85)	2.38(0.66)	2.94(1.19)	3.26(0.94)	2.52(0.75)	F(2,584)=8.57**(いけなさ)
盗み	2.74(1.07)	3.00(0.76)	2.38(0.66)	2.92(1.08)	3.39(1.10)	2.52(0.74)	F(2,585)=12.41**(いけなさ)
恐喝	2.62(0.92)	2.94(0.68)	2.39(0.69)	3.50(1.23)	3.14(1.27)	2.53(0.75)	F(2,584)=7.37**(いけなさ)
暴行	2.70(0.91)	2.52(0.72)	2.37(0.67)	2.92(0.83)	3.00(0.92)	2.51(0.74)	F(2,582)=6.70**(いけなさ)
薬物	2.95(0.91)	2.95(0.71)	2.33(0.64)	3.27(0.89)	2.68(0.96)	2.53(0.76)	F(2,585)=12.75**(いけなさ)
軽援交	2.59(0.81)	2.40(0.66)	2.34(0.65)	2.72(0.75)	2.62(0.81)	2.48(0.76)	F(2,582)=5.33**(いけなさ)
重援交	2.67(0.84)	2.51(0.68)	2.31(0.65)	2.97(0.98)	2.64(0.82)	2.51(0.74)	F(2,580)=8.16**(いけなさ)
性強要	3.04(0.96)	2.67(0.70)	2.35(0.65)	2.77(1.22)	2.98(0.80)	2.50(0.74)	F(2,580)=9.87**(いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と自我機能『刺激障壁』

高校生の自我機能『刺激障壁』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動を「とめるか」（「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準）との関連を検討するため、自

我機能調査票のうち『刺激障壁』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-16-3に示す。

問題行動を「とめるか」の主効果による有意差があったのは、盗み、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要の5種類の問題行動であった。これらの問題行動を「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも自我機能『刺激障壁』尺度得点が高かった。

従って、友だちが、盗み、暴行、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要をしているのを見た時に「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも、外界からの刺激に対する感度および反応態度をほぼ適切なかたちで持ちうるかどうか、といった機能における発達が未熟であることが示された。

表4-16-3 問題行動に対する意識と自我機能『刺激障壁』

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
盗み	2.73(.94)	2.49(.72)	2.36(.64)	2.85(.92)	2.83(.84)	2.53(.76)	F(2,584)=5.01**(とめるか)
薬物	2.71(.93)	2.91(.59)	2.36(.67)	2.95(.92)	2.68(.91)	2.53(.76)	F(2,584)=6.50**(とめるか)
軽援交	2.59(.81)	2.53(.62)	2.26(.65)	2.64(.85)	2.52(.79)	2.54(.75)	F(2,579)=3.88*(とめるか)
重援交	2.70(.80)	2.42(.62)	2.30(.67)	2.66(.83)	2.80(.92)	2.51(.75)	F(2,578)=4.89**(とめるか)
性強要	2.87(.87)	2.54(.53)	2.31(.65)	2.59(.95)	2.79(.78)	2.51(.76)	F(2,577)=6.84**(とめるか)

*p<0.05, **p<0.01

第17項 問題行動と自我機能『自律的機能』との関連

①問題行動の実体験の有無と自我機能『自律的機能』

高校生の自我機能『自律的機能』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『自律的機能』尺度得点を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-17-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、飲酒、盗み、暴行、薬物・ドラッグであった。飲酒、盗み、暴行、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも自我機能『自律的機能』尺度得点が高かった。

従って、飲酒、盗み、暴行、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも、記憶や思考などの認知的能力とそれに関連するエネルギーの維持・統制に関する能力における発達が未熟であることが示された。

表4-17-1 問題行動の実体験の有無と自我機能『自律的機能』

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
飲酒	3.02(.76)	3.23(.79)	3.19(.70)	3.28(.76)	F(1,587)=4.37*(体験)
盗み	3.14(.82)	3.34(.63)	3.24(.75)	3.38(.65)	F(1,586)=3.91*(体験)
暴行	3.05(.80)	3.35(.72)	3.23(.74)	3.48(.68)	F(1,584)=10.75**(体験)
薬物	3.17(.79)	3.35(.69)	3.25(.74)	4.07(.12)	F(1,587)=3.97*(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自我機能『自律的機能』

高校生の自我機能『自律的機能』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『自律的機能』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-17-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、盗みおよび暴行であった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が、「いけない」と思っている者よりも自我機能『自律的機能』尺度得点が高かった。

従って、これらの問題行動をいいと思っている者の方が、いけないことと思っている者よりも、記憶や思考などの認知的能力とそれに関連するエネルギーの維持・統制に関する能力における発達が未熟であることが示された。

表4-17-2 問題行動に対する意識と自我機能『自律的機能』

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでもない	いけない	いい	どちらでもない	いけない	
盗み	2.96(0.98)	3.32(0.82)	3.19(0.77)	3.67(0.23)	3.96(0.50)	3.23(0.74)	F(2, 585) = 3.65*(いけなさ)
暴行	3.20(0.79)	3.42(0.59)	3.12(0.81)	3.21(1.07)	3.54(0.62)	3.23(0.74)	F(2, 582) = 4.01*(いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と自我機能『自律的機能』

高校生の自我機能『自律的機能』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動を「とめるか」（「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『自律的機能』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行ったが、「とめるか」の主効果による有意差はみられなかった。